

仙台市文化財調査報告書第409集

# 西台畠遺跡第8次調査

—仙台市あすと長町26街区・高齢者福祉施設建設に伴う発掘調査報告書—

2013年1月

株式会社 山一地所  
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第409集

西台畠遺跡第8次調査

二〇一三年一月

株式会社 山一地所  
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第 409 集

# 西台畠遺跡第 8 次調査

—仙台市あすと長町 26 街区・高齢者福祉施設建設に伴う発掘調査報告書—

2013 年 1 月

株式会社 山一地所  
仙台市教育委員会





## 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残されております。当教育委員会といたしましても、先人たちの残してきた貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、これからの方々の「まちづくり」に欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は、多賀城造営以前の陸奥国府と考えられ、国史跡指定を受けた「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺」の西側で都市整備が進められている「仙台市あすと長町土地区画整理事業」地内で実施された西台畠遺跡第8次発掘調査の成果をまとめたものです。

西台畠遺跡は、昭和32年、煉瓦工場地内での粘土採掘中に弥生土器が発見され、東北大学の伊東信雄先生により出土状況の調査が行われ、遺跡の所在が明らかになりました。この時の資料は、弥生時代中期の仙台平野における葬制を考える上で重要な資料となっており、学史的にも注目される遺跡であります。

区画整理事業に伴う発掘調査は平成10年から開始され、古墳時代後期から奈良時代までとしては、東北地方でも最大級の集落が事業地内にあったことが明らかになり、郡山遺跡に営まれた官衙との関係が考えられております。ここに報告する調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

また、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、特に事業者である株式会社山一地所様には、遺跡の重要性をご理解いただいた上で建築計画を策定いただくなど、ご協力いただきました。

最後になりましたが、一昨年3月11日の東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受けております。仙台市では震災からの復興に向け、「ともに前へ仙台～3・11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査にあたりまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成25年1月

仙台市教育委員会

教育長 青沼 一民



## 例　　言

- 本書は、「仙台市あすと長町土地区画整理事業」地内で仙台市教育委員会が実施した西台畠遺跡第8次調査の成果を収録したものである。
- 発掘調査は、仙台市教育委員会が国際文化財株式会社へ委託して実施した。
- 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課工藤 信一郎、黒田 智章の監理の下、遺構図トレー、出土遺物の登録・実測およびトース・写真撮影、執筆、編集に至るまでの作業を国際文化財株式会社が担当した。
- 本書の執筆・図版作成は、第1・3章を工藤 信一郎、第2・4・5章を辻 広志(国際文化財株式会社)が担当し、第7章については両者で協議を行った。なお、第5章第2節(1)の遺構事実記載と遺物事実記載、石器事実記載と遺物写真撮影は、佐藤 洋(国際文化財株式会社)が担当した。編集は辻が担当した。
- 第6章の自然科学分析については、下層調査で採取した炭化物の年代測定を株式会社加速器分析研究所に分析・執筆を依頼した。
- 調査及び報告書の作成にあたり、株式会社山一地所にご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
- 調査・整理に関する全ての資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

- 第1図・第2図の地形図は、それぞれ国土地理院発行「長町」1:10,000、「仙台」1:50,000を使用した。
- 遺構図中の座標値は、「平面直角座標第X系」を基準としている。図中および本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
- 本書中の土色の記載には、『新版 標準上色帖』2000年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 断面図中の数値は、海拔高度(T.P.)を示す。
- 調査において検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。  
SD:溝跡 SI:竪穴住居跡・竪穴遺構 SK:土坑 SX:性格不明遺構 P:ビット
- 竪穴住居跡の主軸方位の算出、壁面呼称の基準については、『西台畠遺跡第1・2次調査』(仙台市教委2010)に準じた。
- 遺構図版に使用したスクリーントーンは以下の通りである。  
 柱痕跡   貼床跡   縦穴住居跡範囲   壁板痕
- 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎にアラビア数字を付した。ただし、石器については分類にあたり遺物記号Kの後に小文字アルファベットを付し、その分類種別を使用している。  
A:繩文土器 B:弥生土器 C:土師器(非クロロ調整) D:クロコ土師器 E:須恵器 Ka:打製石器 Kc:礫石器  
9. 遺物実測図の縮尺については、打製石器は2/3、それ以外は1/3とした。
- 土師器の実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については、その都度図中に示した。  
 黒色処理
- 上器類の器種および部位呼称、計測位置は、『西台畠遺跡第1・2次調査』(仙台市教委 前掲)に準じた。
- 本書における石器の器種分類および実測図における計測位置は、『西台畠遺跡第1・2次調査』(仙台市教委 前掲)に準じた。
- 遺構・遺物の観察表内における括弧付の計測値は、土器の各径について推定、その他については残存値を示す。
- 掲載した遺物写真的縮尺は原則として遺物実測図に準じた。但し、その縮尺での掲載が困難な場合は、適宜縮尺を変更した。



## 目 次

序文	
例言	
凡例	
<b>第1章 調査にいたる経過</b>	<b>1</b>
第1節 調査事由	1
第2節 調査要項	2
<b>第2章 遺跡の立地と環境</b>	<b>2</b>
<b>第3章 調査区の設定と調査概要</b>	<b>3</b>
第1節 調査区とグリッドの設定	3
第2節 調査概要	4
<b>第4章 基本層序</b>	<b>4</b>
<b>第5章 検出遺構と出土遺物</b>	<b>9</b>
第1節 古墳時代～中世の遺構と遺物:IV層上面の調査	9
1. 古代～中世の遺構と遺物	9
(1)溝跡	9
(2)小溝状遺構群	13
(3)ビット	14
(4)性格不明遺構	14
2. 古墳時代～古代の遺構と遺物	18
(1)竪穴住居跡	18
(2)溝跡	24
3. 遺構外出土遺物	24
第2節 繩文時代～弥生時代の遺構と遺物:IV～XⅠ層の調査（下層調査）	25
1. 検出遺構	25
(1)東区VIa層上面検出遺構	25
(2)東区VIIc1層上面検出遺構	25
2. 出土遺物	26
(1)VIIa層出土遺物	26
(2)VIIb2層出土遺物	27
(3)Xb層出土遺物	27
<b>第6章 西台烟遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)</b>	<b>29</b>
第1節 測定対象試料	29
第2節 測定の意義	29
第3節 化学処理工程	29
第4節 測定方法	29
第5節 算出方法	29



第6節 測定結果 .....	30
第7章 総括 .....	32
1. 繩文時代後期～弥生時代中期 .....	32
2. 古墳時代～奈良時代 .....	32
3. 平安時代～中世 .....	32
写真図版 .....	35
報告書抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	1	第15図 SI129竪穴住居跡(1) .....	19
第2図 西台畑遺跡と周辺の遺跡 .....	2	第16図 SI129竪穴住居跡(2) .....	20
第3図 調査区・グリッド配置図 .....	3	第17図 SI129竪穴住居跡出土遺物 .....	21
第4図 基本層序柱状模式図 .....	5	第18図 SI130竪穴住居跡 .....	23
第5図 西区北壁断面図 .....	6	第19図 SI131竪穴住居跡 .....	24
第6図 東区東壁断面図 .....	7	第20図 道構外出土遺物 .....	25
第7図 西区遺構配置図(IV層上面) .....	10	第21図 東区 VIIa層上面遺構 .....	26
第8図 東区遺構配置図(IV層上面) .....	11	第22図 東区 VIIc1層上面遺構 .....	26
第9図 SD溝跡 .....	12・13	第23図 VIIa層出土遺物全体図 .....	26
第10図 SD溝跡出土遺物 .....	13	第24図 VIIa層出土遺物 .....	27
第11図 SM小溝状遺構群 .....	14	第25図 VIIb2層出土遺物 .....	27
第12図 SX性格不明遺構(1) .....	16	第26図 Xb層出土遺物全体図 .....	28
第13図 SX性格不明遺構(2) .....	17	第27図 Xb層出土遺物 .....	28
第14図 SX性格不明遺構出土遺物 .....	18		

## 表目次

第1表 西台畑遺跡周辺の遺跡一覧 .....	3	第3表 測定結果(補正値) .....	31
第2表 基本層序土層註記 .....	8	第4表 測定結果(未補正値) .....	31

## 写真図版目次

写真図版1 基本層序・壁断面 .....	35	写真図版5 溝跡・性格不明遺構(1) .....	39
写真図版2 調査区全景・竪穴住居跡(1) .....	36	写真図版6 性格不明遺構(2) .....	40
写真図版3 竪穴住居跡(2) .....	37	写真図版7 性格不明遺構(3)・下層調査 .....	41
写真図版4 竪穴住居跡(3) .....	38	写真図版8 出土遺物 .....	42

# 第1章 調査にいたる経過

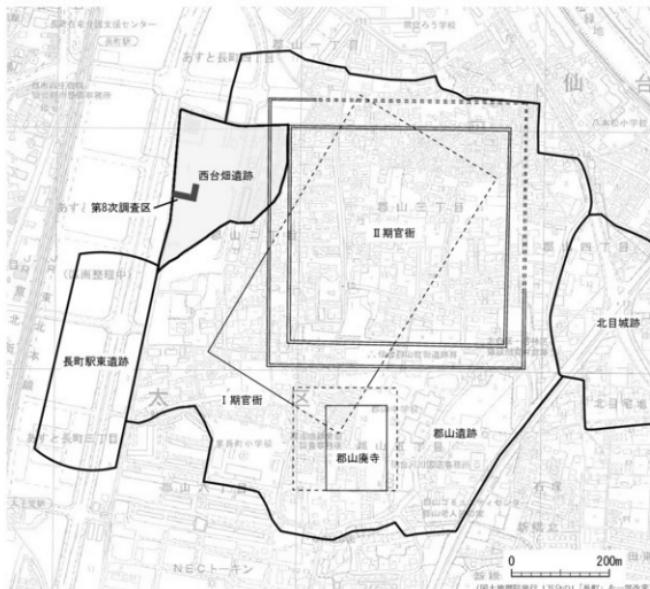
## 第1節 調査事由 (第1図)

仙台市南部の長町地区では、副都心整備事業である「仙台市あすと長町土地区画整理事業」の施行に伴い、事業地内に所在する長町駅東遺跡・西台畠遺跡及び郡山遺跡の一部を対象として、平成10年から現在まで継続して発掘調査が行われ、6世紀末頃から8世紀初めの時期を中心とする堅穴住居跡が総数500軒以上発見されている。

また、区画整理事業とは別に、郡山遺跡では、昭和54年以来継続して発掘調査が行われ、陸奥国府である多賀城に先行する2時期の官衙（I期官衙→II期官衙）があったことが明らかになっている。

今回の西台畠遺跡第8次調査は、あすと長町事業地内26街区において株式会社山一地所により計画された高齢者福祉施設建設に伴い、仙台市教育委員会に事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出されたことに始まる。開発地は西台畠遺跡の南西部にあたり、平成19年に行われた第7次調査区の南に位置しており、平成22年には、今回とは別の事業者から提出された建築計画による遺構確認調査が行われていた。

調査の実施に向けた協議の中で、古代の遺構面を可能な限り保存するなど、建築計画の変更についてもご配慮をいただいた。教育委員会と事業者の協議の結果、発掘調査については建物部分を対象に実施することになった。



第1図 遺跡位置図



## 第2節 調査要項

遺跡名称:西台烟遺跡(宮城県遺跡地名番号01005 仙台市登録番号 C-317)

所 在 地:仙台市あすと長町土地区画整理事業地区26街区1,6,7,8,9画地

調査期間:2012年(平成24年)6月12日～2012年(平成24年)8月3日

調査主体:仙台市教育委員会

調査原因:高齢者福祉施設建設工事に伴う発掘調査

調査担当:仙台市教育委員会文化財課調査指導係 主任 工藤信一郎 主事 黒田智章

調査組織:国際文化財株式会社 調査員 辻 広志 調査補助員 佐藤 洋

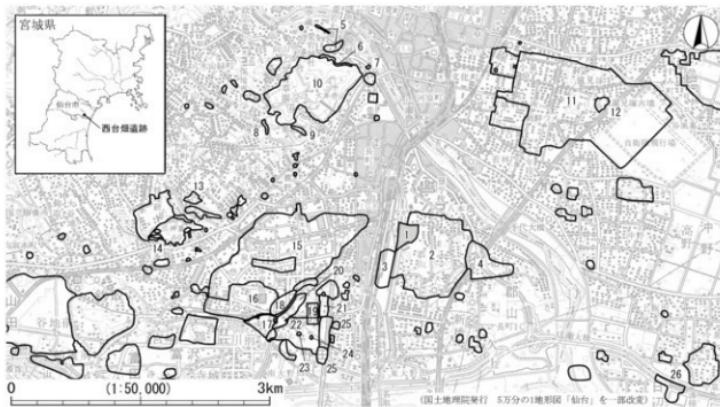
調査対象面積:約860m<sup>2</sup>(調査面積:791m<sup>2</sup>)

## 第2章 遺跡の立地と環境(第1・2図・第1表)

西台烟遺跡は、仙台市南東部、太白区郡山二丁目に位置する縄文時代～中世の遺跡である。広瀬川と名取川に挟まれた沖積地(郡山低地)の東側、標高約11mの自然堤防上に立地している。本遺跡の東には、多賀城以前の陸奥国府と考えられ、平成18年に国史跡の指定を受けた郡山遺跡が接している。また、南々西には長町駅東遺跡が近接し、本遺跡と共に郡山遺跡の官衙に関連する集落と考えられている。

今回の調査地は、現在都市整備が進む「仙台市あすと長町土地地区画整理事業」地内の26街区に所在する。当該地には昭和30年代まで煉瓦工場があり、原料となる粘土の採掘が行われていた。昭和32年には粘土採掘中に弥生時代中期(楕円形壠式)の土器棺墓及び土坑墓が発見されており、当時の工場建物配置等から、今回の調査地は当時の発見地点と近接していることが考えられる。

なお、本遺跡周辺の歴史的環境の詳細は、『西台烟遺跡第1・2次調査』(仙台市教委2010)を参照されたい。



第2図 西台烟遺跡と周辺の遺跡

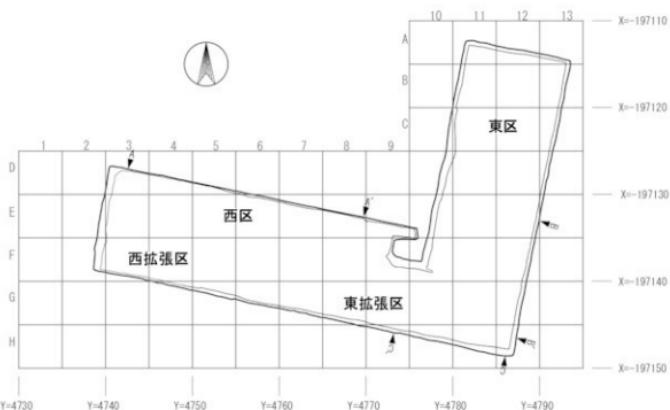
No.	遺跡名	位置	種別	時代	No.	遺跡名	位置	種別	時代
1	西竹畠遺跡	自然遺跡	遺物遺跡・無機物・陶文(縦・横)・骨(牛・馬・鹿・犬)・骨器(中型・大型)		11	東竹畠遺跡	石器鉄器類	石器	新石器・平安
2	柏山遺跡	自然遺跡	植物物・骨骼物・鳥糞物	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世・近世	12	東の森遺跡	自然遺跡	動物骨・古器物・骨器	縄文(中期)・平安・中世・近世
3	浜町駁船遺跡	自然遺跡	植物遺跡・無機物・水田跡・墓場	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世	13	東の森遺跡	自然遺跡	動物骨・古器物・骨器	縄文(中期)・平安・中世・近世
4	北口遺跡	自然遺跡	植物物・無機物・水田跡	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世・近世	14	山ノ森遺跡	自然遺跡・石礫平野	動物骨・古器物・骨器	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
5	愛宕山崎穴遺跡	石器鉄器類	鐵(大型)・骨(鹿)		15	下ノ内遺跡	自然遺跡	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
6	大久佐山遺跡	石器鉄器類	鐵(大型)・骨(鹿)		16	下ノ内遺跡	自然遺跡	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
7	田舎寺崎穴遺跡	石器鉄器類	鐵(大型)・骨(鹿)		17	下ノ内遺跡	自然遺跡	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
8	二ツ岩遺跡	石器鉄器類	鐵(大型)・骨(鹿)		18	下ノ内遺跡	自然遺跡	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
9	尾ノ崎穴遺跡	石器鉄器類	鐵(大型)・骨(鹿)		19	大野田古墳遺跡	自然遺跡	石器遺跡	縄文・古墳
10	尾ノ崎遺跡	石器	鐵	平安	20	大野田古墳	自然遺跡	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・近世
11	雨小屋遺跡	自然遺跡	無機物・無機物	後期(中期)・後期(後期)・平安・近世	21	大野田古墳	自然遺跡	動物骨・鐵(大型)	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
12	道原屋穴遺跡	自然遺跡	植物物(門柱・樹木)	後期(中期)・後期(後期)・平安	22	大野田古墳	自然遺跡	動物骨・石器類	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世
13	土手内遺跡	石器	動物骨	縄文(中期)・後期(中期)・後期(後期)・平安・中世・近世	23	春日山古墳	自然遺跡	丹鐵	古墳(中期)

第1表 西台畠遺跡周辺の遺跡一覧

## 第3章 調査区の設定と調査概要

### 第1節 調査区とグリッドの設定(第3図)

調査区は、計画された建物位置にあわせて、用地東側の南北棟部分を「東区」、用地南側の東西棟部分を「西区」と呼称した。その後、下層調査に伴う2回目の重機作業時に、西区を南側に拡張し(「西拡張区」)、東区と西区の間の未調査部分の拡張を行った(「東拡張区」)。



第3図 調査区・グリッド配図



調査グリッドは、測量基準点(世界測地系:X=-197110・Y=4730)を原点とする5×5mの方眼を設定し、グリッド呼称については、基準点から南に5m毎にA-H、東に5m毎に1~13の記号を付し、「A-13グリッド」等とした。

## 第2節 調査概要

表土除去作業は、6月13日から重機を使用して開始した。東区については、確認調査成果から古代の遺構確認面が残存する可能性が低いことから、下層調査を想定した調査区設定を行った。西区については、古代面が北側に残存することが想定されたことから、当初は北側約6.5m幅で調査を開始した。その後、西端部で古代面が南へ広がる状況が確認されたことから、下層調査に伴う重機作業時に、南側を約5.5m幅で拡張した。また、東区においても、南端部で遺構面が確認されたことから、拡張を行った。東区は、下層調査と南端部の遺構調査を並行してを行い、西区は、古代面の調査後に下層調査を行い、8月3日に調査を終了した。

調査記録の作成は、遺構平面図はトータルステーションとデジタル平板による器械実測とし、遺構断面図は、トータルステーションとデジタルカメラを用いた写真実測を併用し、一部手実測を行った。写真記録は、35mmモノクロネガとカラーリバーサルを基本とし、補足としてデジタルカメラを使用した。

遺構登録番号は、竪穴住居跡(SI129～)と溝跡(SP79～)については、第7次調査からの連番としたが、小溝状遺構群(SM)・性格不明遺構(SX)・ピット(P)についてはそれぞれ1番からの番号を付している。

## 第4章 基本層序(第4～6図・第2表)

西台畠遺跡の一部は、昭和30年代には煉瓦工場の粘土採掘が行なわれ、その後は旧国鉄仙台資材センターとして利用されていたため、今回の各発掘調査区においても、当時の土取りや整地等による搅乱箇所が多い。このため、古墳時代までの遺構面の残存状況は、良好ではない。

各調査区が上記のような状況にあることから、既報告や今次調査の北側に隣接する17街区道路(平成19年度第7次調査)の調査記録を基に基本層序の把握を行った。これにより今次調査区の基本層序は、第1～3次調査のIV～XⅠ層に大別分層され、土質や混入物等の違いによりさらに24層に細別した。なお、第4図には第7次調査、今次調査における基本層序の対照を、柱状模式図で示した。

以下、各層の特徴と概要について記載する。

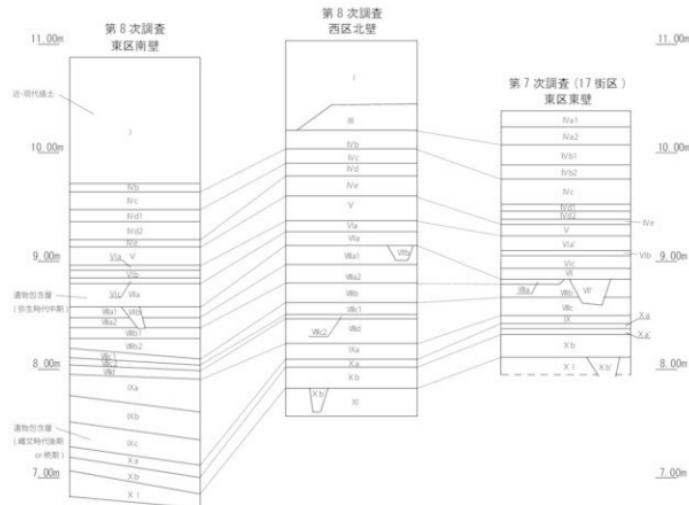
I層：近・現代の盛土及び埋土からなる表土層である。

II層：第1・2次調査では中世～近世にかけての耕作土層(水田土壤)であることが確認されているが、今次調査区では削平により失われていた。

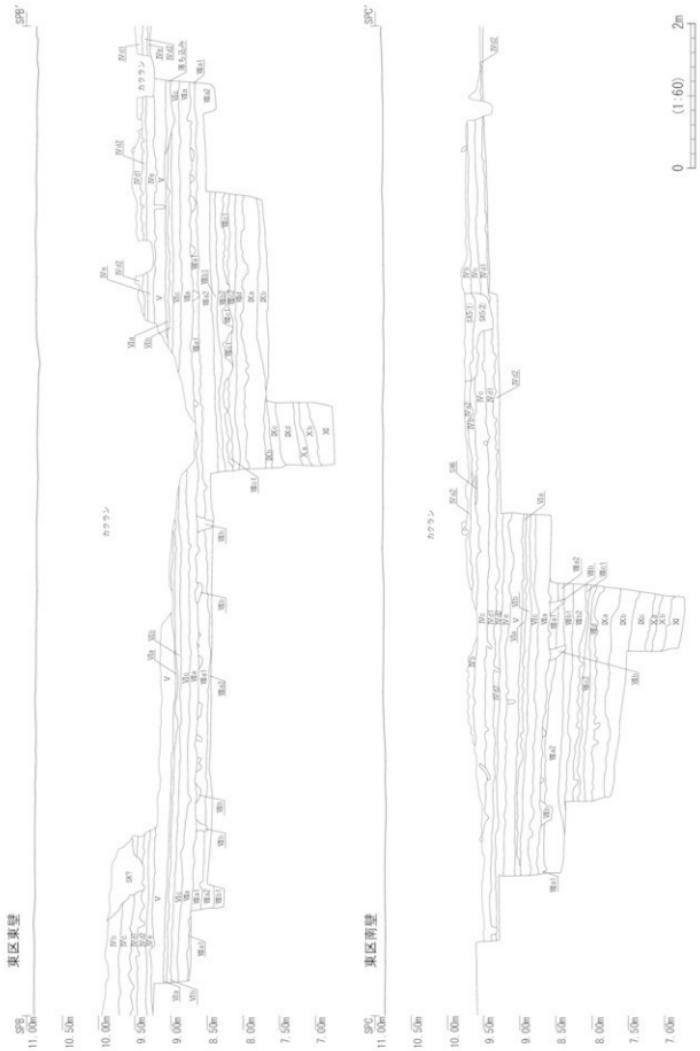
III層：砂質シルトの堆積層で、西区北壁際の一部でのみ確認されたに留まるため、調査区全体に堆積していたものか定かではない。

IV層：シルトないし砂質シルト層からなる層で、隣接する第7次調査との整合からa・b1・b2・c・d1・d2・eの7層に細別した。細別層は、第1次調査1区ではIVa～IVg層が、第2～3次調査ではIVc～IVe層が確認されている。この内、第1～3次調査のIVd層からは、弥生時代中期前葉～中葉に位置づけられる遺物が、比較的多く出土していたが、今次調査では両区共に出土していない。本層の上面が、古代～中世の遺構確認面である。

- V層：シルトないし砂質シルトの自然堆積層で、層厚は10～30cmを測る。遺物の出土はない。
- VI層：シルトと粘土質シルトが互層状に堆積する自然堆積層で、a～cの3層に細別した。層厚は5～25cmを測る。第3次調査では弥生時代中期前葉～中葉の遺物が、第7次調査では弥生時代中期中葉の遺物が出土しているが、今次調査区では出土していない。
- VII層：黒褐色を基調とするシルトの堆積層で、炭化物等を含み、2層に細別した。層厚は5～20cmを測る。第1～3次調査においては、縄文時代晚期中葉～弥生時代中期中葉の間の遺物が出土していたが、今次調査では弥生時代中期中葉に位置づけられる遺物のみ少量出土している。
- VIII層：シルトないし粘土質シルトの自然堆積層で、a1・a2・a3・b1・b2・c1・c2の7層に細別した。VIIIb2層は東区でのみ確認された。層厚は30～70cmを測る。第3次調査では、縄文時代後期中葉～晩期後葉の遺物が少量出土しているが、今次調査では出土していない。
- IX層：粗砂～シルト質細砂の自然堆積層で、東区では層中に多量の植物遺存体を含んでおり、a～cの3層に細別した。層厚は5～70cmを測る。東区の土層堆積状況から、東西両調査区の間に小規模な谷状地形ないし旧河道が存在する可能性が考えられた。
- X層：黒褐色を基調とする粘土質シルトで、a～cの3層に細別した。層厚は10～40cmを測る。黒色の有機物混じりの層であるXb層は、第1～3次調査において縄文時代後期中葉～晩期中葉の遺物包含層で、今次調査においても縄文時代の遺物が少量出土している。
- XI層：灰白色を基調とするシルト質細砂の自然堆積層である。第1～3次調査においては縄文時代晚期中葉以前と考えられる遺物が少量出土しているが、今次調査では出土していない。



第5図 西区北壁断面図



第6図 東区東壁断面図

西区基本层序 A-A'

東区基本層序 B-B'・C-C'

種別	土色	土性	被覆	
IV b	10YR14/4	褐色	シルト	IVB2/深褐色シルト+トネリコ4/3にぶつ=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を地表に含む。
IV c	10YR5/4	にじ=黃褐色	シルト	IVB5/3にじ=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を地表に含む。
IV d	10YR5/2	深褐色	粘土質シルト	IVC4/2-3=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を、地表を除く。花崗岩粉を散在する。
IV d'	10YR4/4	褐色	シルト	IVB4/2=黄褐色シルト+IVC3/2=黄褐色シルトの互層。
IV e	10YR5/6	黄褐色	シルト	褐色の下に、田舎町4/3層を有する。瓦礫層を含む。
V	2.276/2	灰褐色	シルト	IVB4/4=褐色サンドリットとの互層。酸化鉄を地表に含み、植上2013ご沙錆が強い。
VI a	10YR2/2	暗褐色	シルト	2.5NC/2=暗褐色シルト層と酸化鉄を互層に含む。
VI b	10YR6/2	灰褐色	粘土質シルト	IVD3/3=褐色シルト層と酸化鉄を地表に含む。
VI c	10YR4/2	灰褐色	シルト	褐色土層(IVD3/3)の上に、褐色シルト+マンゴン粘土層と、2.276/2=黄褐色シルト層と酸化鉄を互層に含む。酸化鉄を地表に含む。
VII a	10YR2/2	暗褐色	粘土質シルト	IVD4/2-3=褐色シルト層と、褐色土層(IVD3/3)と酸化鉄を互層に含む。花崗岩粉を多く含む。(主花崗岩層)
VII b	10YR3/2	暗褐色	粘土質シルト	IVD5/2-3=褐色シルト層と、褐色土層(IVD3/3)と酸化鉄を互層に含む。
VIII a	2.275/2	褐紅褐色	シルト	IVB/C2/2-3=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII b	10YR5/2	灰褐色	粘土質シルト	IVB/C3/2-3=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII c	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	IVB/C3/2-3にぶつ=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII d	10YR4/4	褐紅褐色	粘土質シルト	IVB/C3/2-3=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII e	2.275/2	褐紅褐色	シルト	IVB/C3/2-3にぶつ=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII f	2.275/2	褐紅褐色	シルト	IVB/C3/2-3にぶつ=黄褐色シルト+マンゴン粘土層を複数、花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。
VIII g	2.275/2	褐紅褐色	砂質シルト	下層ほどD2-D3層と砂質を含む。(主花崗岩層)
IX a	2.274/2	褐紅褐色	砂	花崗岩粉を微量、酸化鉄を地表に含む。下層ほど砂粒が無い。(河川堆積層)
IX b	10Y/2/2	灰オーブーブ	砂	10Y/5/2=褐色シルト+黄褐色シルトの下部(河川堆積層)
IX c	2.275/2	褐色	シルト質酸性砂	下層は(10Y/5/2)の下部(河川堆積層)、上の部分は10Y/2/2=褐色シルト+黄褐色シルトの下部(河川堆積層)。
IX d	2.275/2	セリーグ灰色	シルト質酸性砂	下層は(10Y/5/2)の下部(河川堆積層)、上の部分は10Y/2/2=褐色シルト+黄褐色シルトの下部(河川堆積層)。
X a	10Y/2/2	灰色	粘土質シルト	花崗岩粉を微量、植物遺体を多く含む。(河川堆積層)
X b	2.277/2	黑色	粘土質シルト	花崗岩粉を微量含む。調文時代後期~朝鮮の植物層(河川堆積層)
X I	2.274/2	褐紅褐色	粘土質シルト	花崗岩粉、植物遺体を多く含む。(河川堆積層)

第2表 基本層序土層註記



## 第5章 検出遺構と出土遺物

前章で触れたように近・現代の擾乱による影響は大きく、最初の遺構確認面としたのは、表土層除去後のIV層上面である。検出された遺構は、全体に西区に集中し、東区では上部が削平されていたため散漫な分布を示す。

また、IV層の遺構検出時や遺構調査時に弥生土器の出土が認められたため、IV層以下については弥生時代以前の遺構や遺物の残存状況の確認とその記録を目的として、各調査区に下層調査区を設定し調査を実施した。この結果、VIa層上面から溝状遺構が検出され、VII層内から弥生時代中期中葉の遺物が出土し、X層内からも縄文時代の遺物が出土した。

以下、本章では検出された遺構や出土した遺物について、IV層上面での調査とIV層以下の調査(下層調査)を区別した上で、平安時代～中世、古墳時代～奈良時代、弥生時代以前の各期の遺構・遺物について、時代別に報告する。

### 第1節 古墳時代～中世の遺構と遺物：IV層上面の調査(第7～20図)

#### 1. 古代～中世の遺構と遺物(第7～14図)

本節では表土層直下の基本層IV層上面で検出した遺構群のうち、古代に帰属すると明確に判断し得ない遺構及び遺構内出土遺物について報告する。該当する遺構は、このIV層上面で検出された溝跡(SD)3条、小溝状遺構群(SM)1群3条、ピット(P)30基、性格不明遺構(SX)9基である。遺構内からは陶器、土師器、須恵器等が出土しているが、これらはいずれも流入による堆積土からの出土であり、出土状況等から遺構に伴うと考えられる遺物は皆無である。

##### (1) 溝跡(第9・10図)

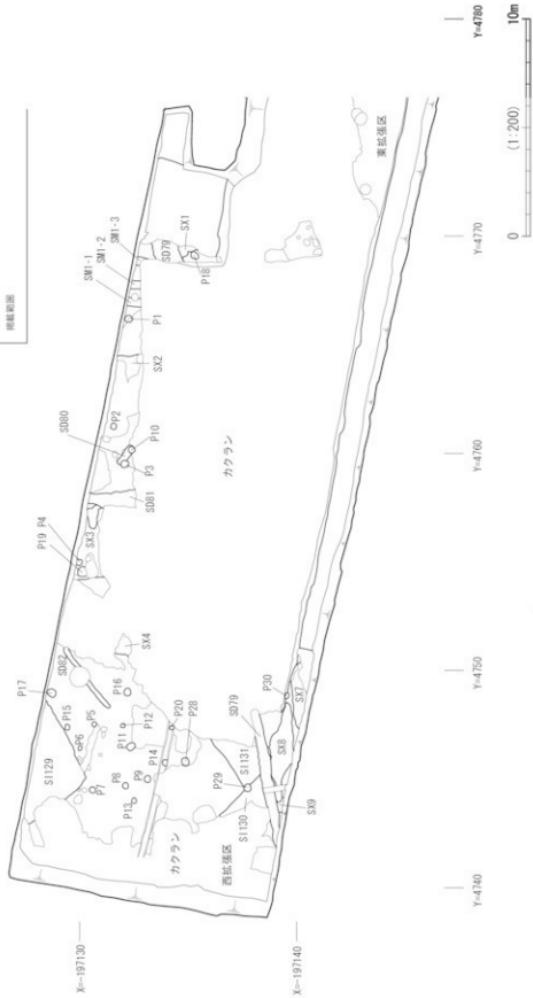
西区において3条(SD 79～82)を検出した。全体の形状と方向が判明するのは、大きく東西に分断されているが東西方向のSD 79の1条のみで、他の東西方向のSD 80や南北方向のSD 81は検出長が短く、他の遺構との位置関係は見出しがたい。

##### SD79 溝跡(第9・10図)

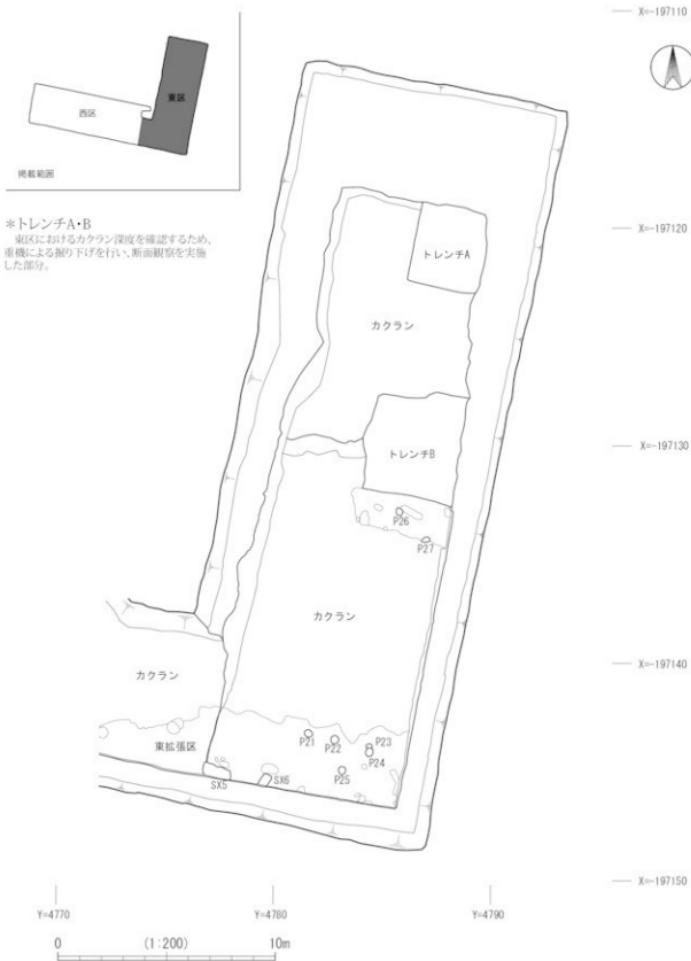
西区の西拡張区F-3・4グリッドと、西区東側E-8グリッドに位置する。SI 130・131、SX 1・8と重複関係にあり、これらより新しい。検出された長さは、西区東のE-8グリッドで140cm、西拡張区のF-3・4グリッドで643cm、その間の約20mは擾乱により残っていないが、総延長は約29m以上となる。溝の規模は、上端幅32～117cm、下端幅11～38cm、深さは最大54cmを測り、断面は逆台形を呈する。方向は西区東側でN=74° E、西拡張区でN=78° Eでほぼ直線的に延び、南端は調査区外に、北東端から東は擾乱により失われる。底面は起伏が残り、掘削後の溝底整地が行われていない状況が確認される。溝底の高さは、南西端が標高10.01m、北東端が標高9.89mで、傾斜勾配は6%の緩やかな北東下がりとなっている。堆積土は西拡張区と東側で検出位置が著しく離れており、相互の対比が困難であったことから別々に層名を付した。黒褐色ないし暗オリーブ褐色のシルト主体の堆積で顯著な水流の痕跡はみられないが、潜水していた可能性がある。堆積土中から弥生土器、土師器、須恵器の小破片が出土しているが、図化できた遺物は第10図の土師器环1点、櫛1点である。1はSD 79の東側で出土した土師器環である。口縁部がやや急角度に立ち上がり、内面の強い棱が特徴的である。2は櫛口縁部破片で、外側調整は脚部のハケメ調整後に口縁部がヨコナデ調整され、その後部分的に縦方向のヘラケズリ調整が確認される。

X=197120 —

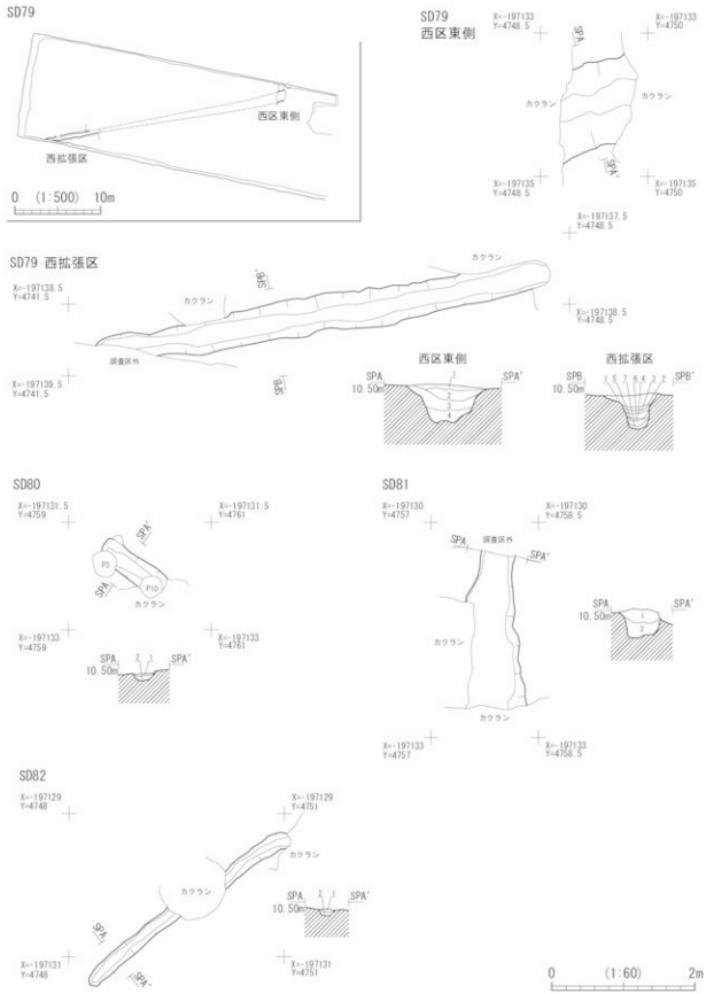
10



第7図 西区構造配置図(V層上面)



第8図 東区遺構配置図(IV層上面)

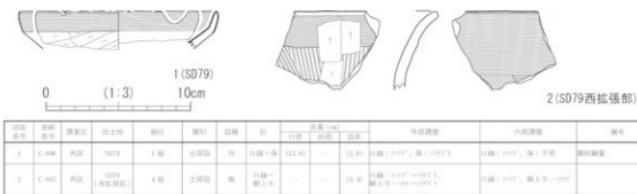


第9図 SD溝跡

漢詩 故宮表

種名	調査区	アリドリ	方向	頻度(%)				種別	土色	土性	備考	
				全数	上層面	下層面	深さ					
3079	西区 高松原区	E-N-E	N-E	1140	120	23~38	54	1	10H2/1	褐色色	シルト	10H2/2 細粒褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								2	10H2/2	褐色色	シルト	10H2/3 褐色シルトと黒褐色シルトを含む。
								3	10H2/2	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと細粒褐色シルトを含む。
								4	10H2/2	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
3079	西区 高松原区	F-D-E	N-E	1642	32~56	11~39	33	1	10H2/2	褐色色	シルト	10H2/1 黄褐色シルトと細粒褐色シルトを含む。
								2	10H2/3	同オリーブ褐色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								3	10H2/1	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								4	10H2/3	同オリーブ褐色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								5	10H2/1	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								6	10H2/4	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
3080	西区	E-N-E	N-E	1104	31~35	12~28	18	1	10H2/3	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								2	10H2/4	同褐色	シルト	10H2/5 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
3081	西区	E-E	N-E	1220	(45~56)	(30~38)	23	1	10H2/3	褐色色	シルト	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								2	10H2/4	褐色色	シルト	10H2/4 同褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
3082	西区	D-E-F	N-E	1440	19~25	8~12	14	1	10H2/4	褐色色	粘質土	10H2/4 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。
								2	10H2/4	褐色色	シルト	10H2/5 黄褐色シルトと粗粒褐色シルトを含む。

第9図 SD溝跡(観察表)



第10図 SD溝跡出土遺物

SD80 溝跡(第9図)

西区の中央部北壁際、E-6・7グリッドに位置する。P3・10と重複関係にあり、これらより古い。検出した規模は、全長104cmと短く、上端幅31～35cm、下端幅12～20cm、深さ18cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。方向はN-57°-Wである。溝底は、概ね平坦である。堆積土は2層で、暗褐色のシルトを主体とする。堆積土中から土顎頬の小破片が出土しているが、図化可能な資料は無かった。

SD81 溝跡(第9図)

西区の中央部北壁際、E-6グリットに位置する。SX3と重複関係にあり、これより古い。検出した規模は、全長220cm、上端幅45～68cm、下端幅33～58cm、深さ23cmを測り、断面は逆台形を呈する。方向は、擾乱により幅が確定できないため、N-5°-W～N-11°-Eの間と推測され、北端は調査区外に、南端は擾乱により失われる。溝底は、概ね平坦である。堆積土は2層で、暗褐色のシルトである。堆積土中から土師器の小破片が出土しているが、図化可能な資料は無かった。

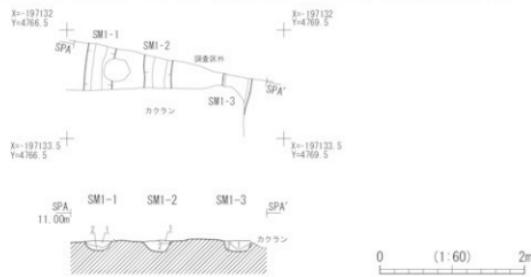
## (2) 小溝状遺構群(第11図)

西区東側において、3条の南北溝からなる1群を検出した。



### SM1-1～3 小溝状遺構群(第11図)

西区東側のE8グリッドに位置する。検出した規模は、SM1-1が全長66cm、上端幅38～40cm、下端幅12～17cm、深さ12cm、SM1-2が全長46cm、上端幅36～40cm、下端幅16～18cm、深さ8cm、SM1-3が全長50cm、上端幅37～40cm、下端幅30～32cm、深さ4cmを測り、3条共に断面は浅い皿状を呈する。方向は南北方向のN~5°～10°-Eで、北端は調査区外に、南端は擾乱により失われる。溝底は、概ね平坦である。堆積土は1層で、黒褐色のシルトである。堆積土中から土師器の小破片が出土しているが、図化可能な資料は無かった。



SM1 小溝状遺構 調査表

遺構名	調査区	アリッジ	方向	規模 (cm)			地盤	土色	土性	備考	
				全長	上端幅	下端幅					
SM1-1~3	西区	E~N	N~W°～11°-E	160～360	36～160	12～32	8～12	1	10983-2	黒褐色	シルト
								2	10983-1	黒褐色	シルト

第11図 SM小溝状遺構群

### (3) ピット(第7・8図)

ピットは30基検出したが、東区南側や西区西側共に、特に集中する状況は見られない。平面形状はほぼ全てが円形で、規模は直径20～40cm前後、深さ10～30cm前後を測る。この内、柱根の痕跡を残すものは17基で、柱根の直径は10～16cm前後である。これらから掘立柱建物が復元できたものは無い。遺構の時期は、堆積土や堅穴住居跡等の遺構との重複関係から、中世以降のものが大半をしめるものと考えられる。

### (4) 性格不明遺構(第12・13図)

東区において2基、西区において7基を検出した。全体の形状や規模が判明するものは無い。SX4・8以外に図化可能な資料は出土していない。

#### SX1 性格不明遺構(第12図)

西区東側のE・F-8グリッドにかけて位置する。SD7と重複関係にあり、これより古い遺構である。検出した規模は、現状で長軸97cm、短軸95cm、深さ8cmを測り、周囲を擾乱により失っているため、全体の形状や性格は明らかでない。堆積土は3層である。

#### SX2 性格不明遺構(第12図)

西区北壁のE-7グリッドに位置する。北壁に遺構の東側上端を残すのみで、西側と南側を擾乱により失っている。



検出した規模は、現状で長軸125cm、短軸100cm、深さ21cmを測り、全体の形状や性格は明らかでない。堆積土は1層である。

#### SX3 性格不明遺構(第12図)

西区北壁のD-E-5・6グリットに位置する。P4・19、SD81と重複関係にあり、P4・19より新しい遺構で、SD81より古い遺構である。北壁に遺構断面を残すが、東側をSD81により、西側と南側を擾乱により失っている。検出した規模は、現状で東西340cm、南北142cm、深さ35cmを測り、全体の形状や性格は明らかでない。堆積土は3層である。

#### SX4 性格不明遺構(第12図)

西区のE-5グリットに位置する。後述のSD82の南東に位置することから、堅穴住居跡の掘り方埋土の一部が残存したものである可能性もある。東側以外の全てを擾乱により失っており、残存する規模は現状で東西97cm、南北75cm、深さ18cmを測る。堆積土は1層である。

SX4から出土した土師器環1点を、第14図に掲載した。1は土師器環口縁部破片で、内外面ともに黒色処理が施されている。

#### SX5 性格不明遺構(第12図)

東区南壁隅のG-H-10グリットに位置する。土坑状の遺構である。検出した規模は現状で長軸132cm、短軸60cm以上、深さ約22cmを測るが、南側が調査区外へ延び全体の形状は不明である。堆積土は2層である。

#### SX6 性格不明遺構(第12図)

東区南壁H-10グリットのSX5東隣に位置する。SX5同様に南壁に入る浅い土坑状の遺構である。検出した規模は現状で長軸55cm、短軸42cm、深さ8cmを測るが、南端が調査区外へ延び、形状は明確でない。堆積土は1層である。

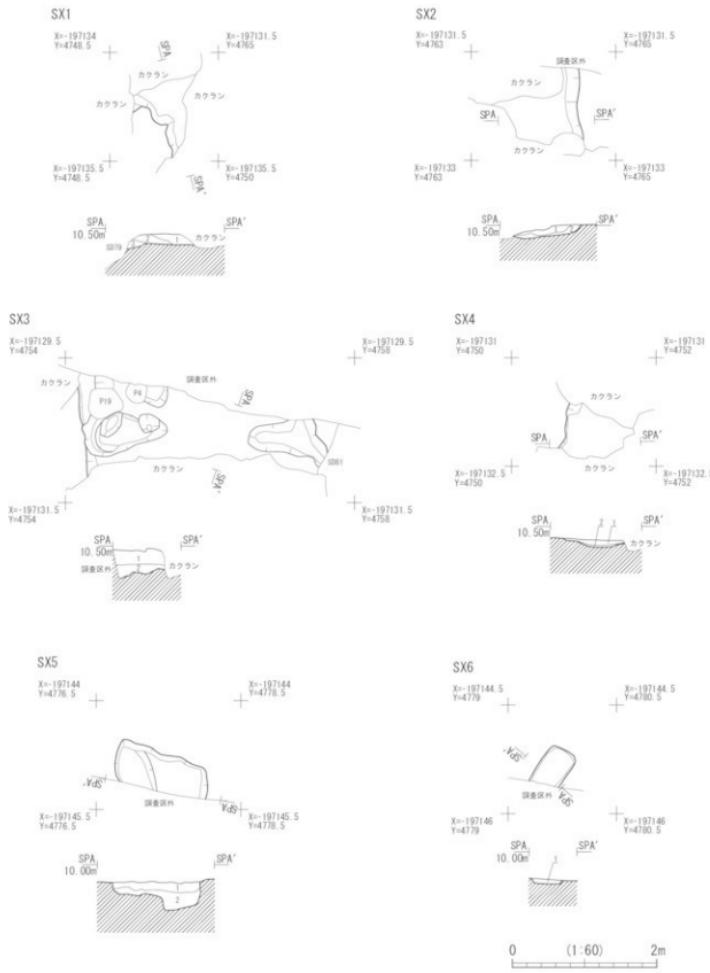
#### SX7 性格不明遺構(第13図)

西区の西拡張区南壁のF-G-4・5グリットに位置する。東側も北側も擾乱で、南側は南壁内であり、溝状の遺構ではないかと思われるが判然としない。検出した規模は現状で東西373cm、南北84cm、深さ13cmを測る。堆積土は1層である。

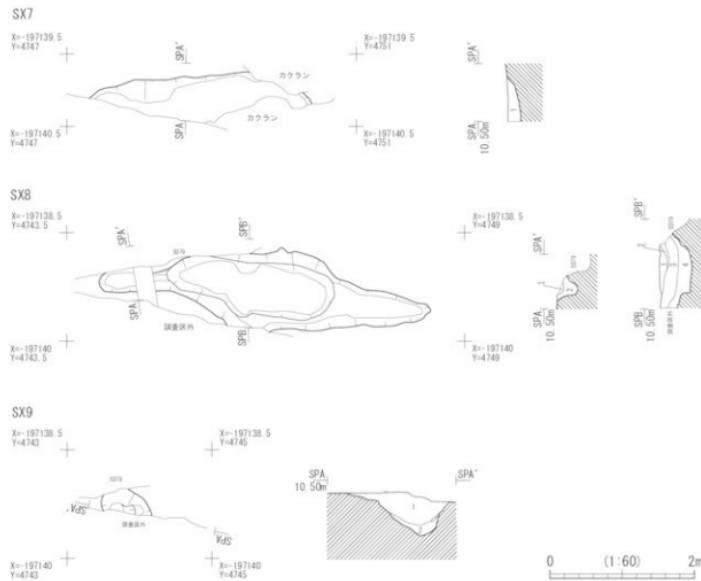
#### SX8 性格不明遺構(第13図)

西区の西拡張区南壁際のE-3・4、G-4グリットに位置する。東西方向に長い土坑状の遺構で、堅穴住居跡SI130、溝跡SD79と重複関係にあり、SI130より新しく、SD79より古い遺構である。その規模は現状で長軸460cm、短軸65cm、深さが5～32cmである。その性格は形状と共に明らかではない。堆積層は4層である。

SX8から出土した土師器環2点・土師器環1点を、第14図に掲載した。いずれも堆積土中からの出土であり、遺構に伴う遺物ではなく周囲から流入したものと考えられる。2・3はいずれも内面黒色処理が施された土師器環で、2は外面の口縁部と体部の境に明瞭な段があり、丸底の环と考えられる。3は平底状の丸底を呈する。4は土師器環の破片で器形は長胴を呈すると推測される。



第12図 SX性格不明遺構(1)

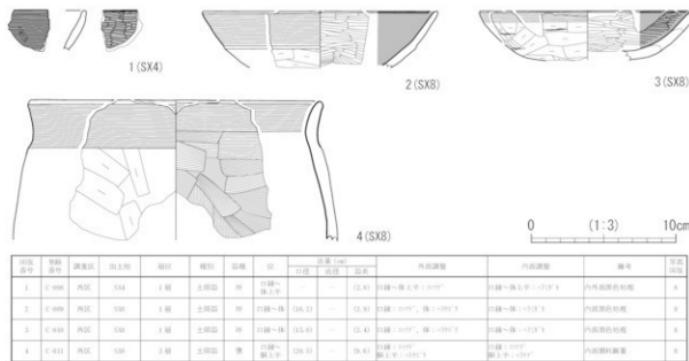


### 第13図 SX性格不明遺構(2)



### SX9 性格不明遺構(第13図)

西区の西拡張区南壁際のF3グリッドに位置する。土坑状の遺構で、性格不明遺構SX8、竪穴住居跡SI130、溝跡SD79と重複関係にあり、SX8とSI130よりも新しく、SD79より古い遺構である。検出した規模は現状で長軸70cm、短軸35cm、深さが64cmを測る。堆積層は2層である。



第14図 SX性格不明遺構出土遺物

## 2. 古墳時代～古代の遺構と遺物(第15～20図)

本項では基本土層IV層上面で検出した遺構群のうち、竪穴住居跡等の古墳時代～古代の遺構と遺構内出土遺物について報告する。該当する遺構は、竪穴住居跡(SI)3軒、溝跡(SD)1条である。

### (1) 竪穴住居跡(第15～19図)

西区で3軒を検出した。擾乱の影響が著しい他、調査区外にかかるなど、全体が検出されたものは無い。3軒のうち2軒は掘り方のみの検出で、いずれも残存状況は極めて悪く、共伴遺物の出土も少ないとから、明確な帰属時期を判断するには至らなかった。しかし、周辺の調査成果とSI129の共伴遺物の年代から、6世紀末葉～8世紀初頭の年代幅に収まるものと考えられる。

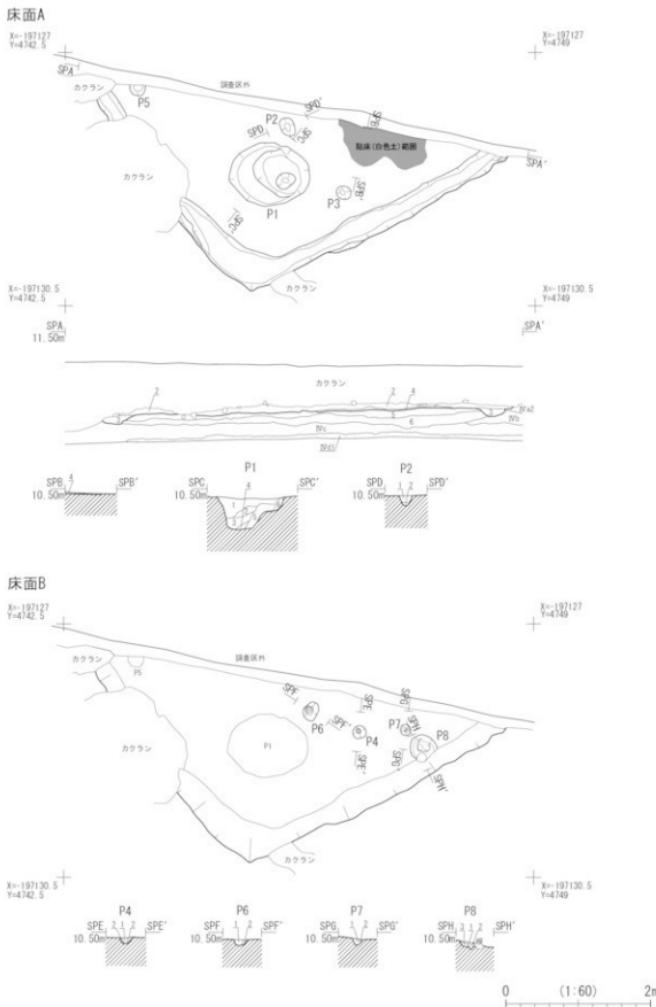
竪穴住居跡の上部構造については残存状況から定かではないものの、SI130において壁板の痕跡と考えられる堆積土が確認されたことが注目される。

#### SI129 竪穴住居跡(第15～17図)

【位置・確認】西区西側、D-3グリッドに位置する。北側は調査区外にかかり、全体の4分の1程度が検出された。上面は大きく削平されている。

【重複】他遺構との重複はない。

【規模・形態】検出した掘り方範囲は、竪穴住居跡の南西隅部であるため規模は不明で、南西辺421cm、南東辺407cmを測る。平面形状は方形ないし長方形を呈するものと推定される。



第15図 SI129竪穴住居跡(1)



掘り方平面



SI129 埋積土 記記表

固積	部位	上地	上地	標高
柱貫構造	1	10H2/4	暗褐色	シルト
柱貫構造	2	10H2/4	褐色	シルト
柱	3	10H2/3	暗褐色	シルト
柱	4	10H2/2	暗褐色	シルト
(台形範囲)	4	10H2/2	灰褐色	シルト
底層	5	10H2/4	暗褐色	シルト
底層	6	10H2/4	暗褐色	シルト
工具層	7	10H2/3	暗褐色	シルト

SI129 施工堆積土 記記表

固積	部位	上地	上地	標高
P1	1	10H2/4	暗褐色	シルト
	2	10H2/3	暗褐色	シルト
	3	10H2/4	暗褐色	シルト
	4	10H2/3	暗褐色	シルト
	5	10H2/4	暗褐色	シルト
	6	10H2/2	灰褐色	シルト
P2	1	10H2/2	暗褐色	シルト
	2	10H2/2	暗褐色	シルト
P3	1	10H2/4	灰褐色	シルト
	2	10H2/3	暗褐色	シルト
P4	1	10H2/4	灰褐色	シルト
	2	10H2/3	暗褐色	シルト
P5	1	10H2/4	灰褐色	シルト
	2	10H2/4	暗褐色	シルト
P6	1	10H2/2	暗褐色	シルト
	2	10H2/4	灰褐色	シルト
P7	1	10H2/3	暗褐色	シルト
	2	10H2/3	暗褐色	シルト
P8	1	10H2/2	灰褐色	シルト
	2	10H2/2	暗褐色	シルト
	3	10H2/2	暗褐色	シルト
P9	1	10H2/2	暗褐色	シルト
	2	10H2/2	暗褐色	シルト
P10	1	10H2/2	暗褐色	シルト

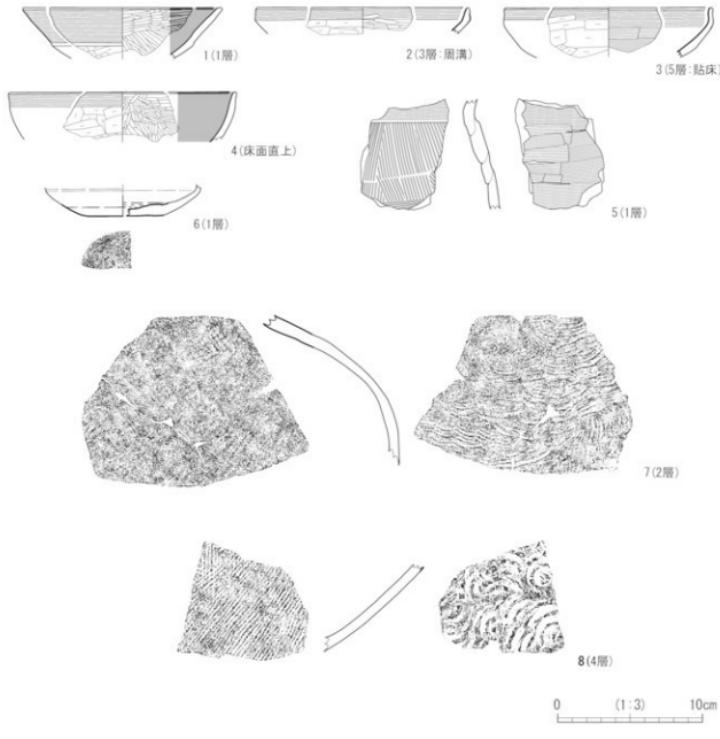
SI129 掘削 細部表

固積名	平面形	規模 (m)	深さ (m)	標高	固積名	平面形	規模 (m)	深さ (m)	標高
P1	楕円形	10.9 × 9.0	2.7	13.8m	P6	楕円形	25 × 20	1.0	対地あり
P2	楕円形	25 × 20	3.0		P7	楕円形	15 × 13	8	対地あり
P3	楕円形	19 × 17	1.2		P8	楕円形	24.0 × 26	12	対地あり
P4	楕円形	17 × 17	9		P9	楕円形	27 × 23	6	
P5	楕円形	21 × 14.0	9		P10	半長方形	20.0 × 18	7	

SI129 埋積土 記記表

固積	部位	上地	上地	標高
SK1	1	10H2/4	暗褐色	シルト
	2	10H2/3	暗褐色	シルト

第16図 SI129豎穴住居跡(2)



層位 番号	分類 項目	測量面	測定面	幅員	横幅	面積	計 数	質量 (kg)	外側測量	内側測量	編 號	写真 番号
1 C-002	西区	SI129 1層	土間部	30	118~116	(3,4)	33	29kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	33kg / 30kg*			
2 C-004	西区	SI129 3層(周溝)	土間部	30	118~116	(4,2)	40	29kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1			
3 C-005	西区	SI129 5層(貼床)	土間部	30	118~116	(4,4)	34	29kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1			
4 C-003	西区	SI129 6層(貼床)	土間部	30	118~116	(5,1)	37	29kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1			
5 C-001	西区	SI129 1層	土間部	30	118~116	—	23	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1			
6 C-004	西区	SI129 1層	測定面	30	118~116	(5,4)	32	29kg / 30kg*, 鋼 -1PC1	30kg / 30kg*, 鋼 -1PC1			
7 C-002	西区	SI129 2層	測定面	30	118~116	—	38,21	29kg / 30kg* → 30kg*	30kg / 30kg* → 30kg*			
8 C-003	西区	SI129 4層	測定面	30	118~116	—	36,40	29kg / 30kg* → 30kg*	30kg / 30kg* → 30kg*			

第17図 SI129竪穴住居跡出土遺物



【方向】長軸基準でN-51°-Eである。

【堆積土】6層に分層された。1・2層は住居堆積土、3層は周溝堆積土、4・5層は貼床と考えられる。4層は部分的に確認され、5層の貼床土の上面に白色の粘土が貼り付けられていた。6層は掘り方の埋め土である。

【壁面】検出された範囲においては直線的に外傾して立ち上がる。

【床面】概ね平坦である。掘り方の上面全体に貼床(5層)が構築され、さらに部分的に白色粘土(4層)が貼り付けられていた。また、5層の貼床下面から柱痕を持つピットが複数検出されたことから、床面の造り替えが行われており、新しい面を床面A、古い面を床面Bとして第15図に示した。

【柱穴】ピットは10基検出され、そのうち5基で柱痕が確認された。床面Aで検出されたP1は位置と規模から主柱穴であると考えられ、5・6層の状況から柱が抜き取られた可能性が高いが、P1の主柱穴は床面B時にも機能していたと推測される。床面Bで検出されたP4・6・7・8の4基は、規模から補助的な柱穴であると考えられる。

【周溝】検出した範囲においては壁面に沿って周全する。規模は幅20～45cm、深さは13～15cmを測る。

【その他の施設】掘り方下面から土坑1基(SK1)を検出した(第16図)。調査段階では土坑の長軸が堅穴住居跡と一致することなどから、掘り方に伴う土坑として調査していたが、主柱穴や掘り方で確認された工具痕と重複しこれらよりも古いくことから堅穴住居跡構築以前の土坑であると判断した。

【出土遺物】土師器壺4点、土師器甕1点、須恵器壺1点、須恵器甕2点を第17図に掲載した。

1は口縁部が大きく外反し、欠失しているものの底部は丸底と推定される壺破片である。2は関東系土器(南小泉型関東系土器)の特徴を有する環口縁部破片で内外面ともに黒色漆仕上げされている。3も口縁部が「S字状」を呈する南小泉型関東系土器の特徴を有する土師器壺である。4は口縁部がやや「S字状」に外反する土師器壺で、内面に黒色処理が施されている。5は土師器の腹胸部破片で長胴系の甕と考えられる。6は平底の須恵器壺、7・8は須恵器甕の胸腹部破片で球形状の甕であると考えられる。

### SI130 堅穴住居跡(第18図)

【位置・確認】西区南西端、E-3グリッドに位置する。床面から上位は削平されており、掘り方の一部のみを検出した。擾乱部分が多く上面遺構との重複により残存状況は極めて悪い。

【重複】SD79・SX8・P29と重複関係にあり、これらより古い。

【規模・形態】検出した掘り方範囲の規模で、北東辺454cm、北西辺420cmを測る。平面形状は不明である。

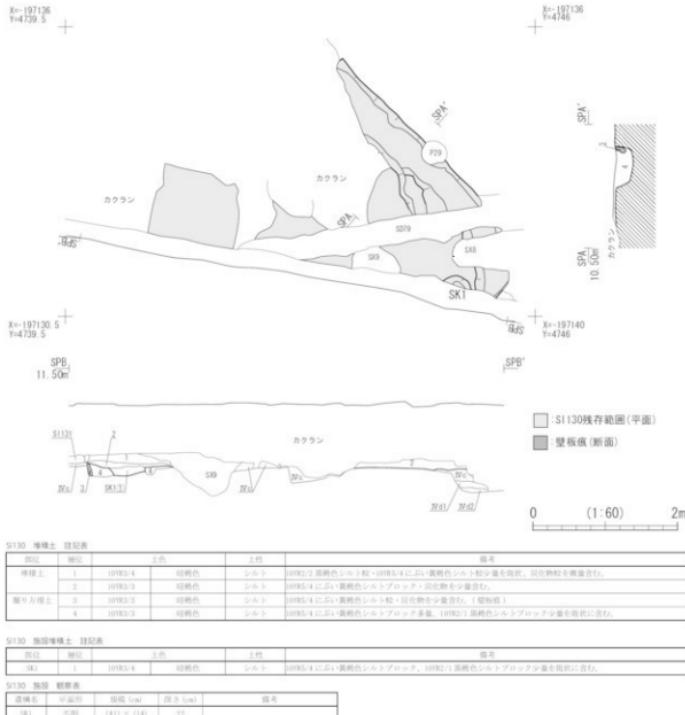
【方向】床面より上位は削平されているため、不明である。

【堆積土】4層が確認された。1・2層は住居堆積土であるが、削平により失われており、調査区壁面でのみ確認された。3層は壁板を立てていた痕跡と考えられる土層で、掘り方の壁面に沿って3～5cm程の幅で確認された。4層は掘り方の埋め土で、壁板を立てた後に充填されたと考えられる。

【掘り方】壁面に沿って60～80cm程の幅で溝状に掘り窪められている。検出面からの深さで20～25cmを測る。

【その他の施設】土坑1基を検出した。大半が調査区外にかかり全体形状は不明である。深さは最大で22cmを測る。

【出土遺物】ごく少量の遺物が出土したが、時期判断可能な遺物は出土しておらず、図化可能な資料はなかった。



第18図 SI130豎穴住居跡

### SI131 豊穴住居跡(第19図)

【位置・確認】西区南西端、E-3 グリッドに位置する。床面から上位及び掘り方の大半が削平されており、残存する掘り方埋め土の一部のみを検出した。

【重複】SD79・SI130と重複関係にあり、これらより古い。

【規模・形態】壁面は残存しておらず、規模・平面形ともに不明である。

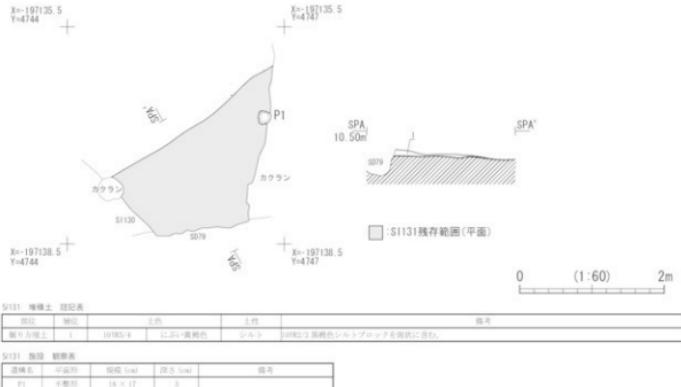
【方向】壁面は残存しておらず、不明である。

【堆積土】掘り方埋め土である1層のみが確認された。

【掘り方】形状とともに不明である。

【その他の施設】ピット1基が検出された。底面が僅かに残る程度であり、検出面からの深さは3cmを測る。

【出土遺物】ごく少量の遺物が出土したが、時期判断可能な遺物は出土しておらず、図化可能な資料はなかった。



第19図 SI131豎穴住居跡

## (2) 溝跡(第9図)

西区で、豎穴住居跡の周溝とみられる溝1条を検出した。

## SD82 溝跡(第9図)

西区の西北壁際、D-5-E-4グリットに位置する。擾乱により中央と東側を失う。検出した長さは345cm、上端幅20～25cm、下端幅10～13cm、深さ5～12cmを測り、断面は北西辺に角度が急な逆台形を呈する。方向はN 53°・Eで、北端は僅かに東に折れ曲がる。溝底は、概ね平坦である。堆積土は2層で、暗褐色のシルトである。堆積土中から土器類の小破片が出土しているが、固化可能な資料は無かった。

このSD82は、隣接するSI129・131とほぼ同方向で、溝の形状や堆積物の状況などから、豎穴住居跡の周溝となる可能性もある。

## 3. 遺構外出土遺物(第20図)

表土層掘削や調査区内の擾乱、遺構検出時に、遺構に帰属しない遺物が少量ではあるが出土している。これらの遺物の大半は、本遺跡の主要な時期である古墳時代後期～中世の遺物で、これに少量の近代の遺物を含んでいる。

今次調査ではIV層上面が遺構を検出したもっとも上面の遺構検出面であったが、西区東側の東西長さ542cm以上×幅65cm以上×厚さ53cmの範囲に、にじい黄褐色の砂質シルトの基本土層のⅢ層とした堆積土がみられた。このⅢ層は、南側と西側を擾乱で失い、限られた範囲にしか残存しておらず、2次堆積の可能性も考えられるが、明確な性格を把握するまでには至らなかった。

このⅢ層の下部から土器類が1点出土している(第20図)。1は複合口縁で有段の壺で、口縁～頸部の破片である。頸部は横方向のヘラナデ、口縁部は横方向のハケメ調整の後、ヨコナデ調整されている。遺物の時期は、古墳時代前期の塙釜式期と考えられる。



区分	番号	調査区	出土土	種別	特徴	状態	寸法	底面	表面	断面	外観調査	内部調査	備考	図版
I	Ⅳ-402	西区	3.7	黒	土器	黑	口縁～底 38.00	(2.3)	(2.3)	(2.3)	(2.3)	(2.3)	4	1008

第20図 遺構外出土遺物

## 第2節 繩文時代～弥生時代の遺構と遺物：IV～X I層の調査(下層調査) (第21～27図)

下層調査は、基本土層第IV層上面での調査後に、比較的壊乱の少ない東区南側の1カ所(5m×12.5m)と西区中央の1カ所(10m×5m)において調査区を設定し、弥生時代以前の遺構遺物の確認と記録を目的に、基本土層X I層までの各層上面で遺構検出と出土遺物の地点上げを行った。

その結果、東区では、Vla層上面とVlc1層で溝状の落ち込みを検出した。弥生時代の遺物としては、Vla層から中期中葉の遺物が出土し、Vlb2層から流紋岩製の石核1点が出土している。また、Xb層から繩文時代後期～晚期の遺物が少量出土している。西区では、Vla層から弥生時代中期中葉の土器が出土している。

以下、本節では、今次下層調査で確認された遺構と、各基本土層から出土した遺物のうち、図示が可能であったもので、器形や文様に特徴のある土器や石器について報告する。

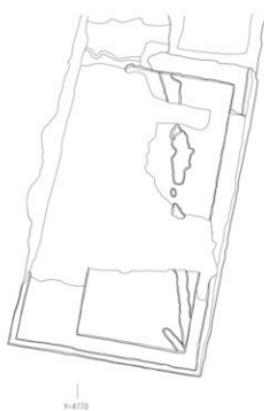
### 1. 検出遺構(第21・22図)

#### (1) 東区Vla層上面検出遺構(第21図)

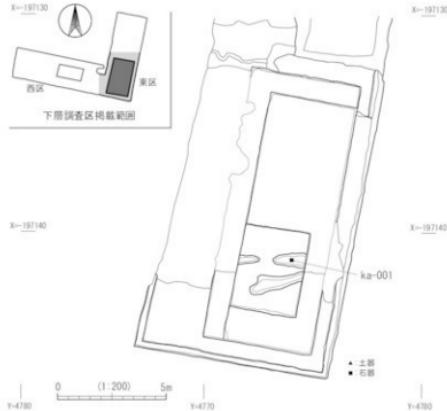
東区のVla層上面において、浅い溝状の落ち込み2条が検出された。東側にある南北方向の溝状の落ち込みの規模は、全長12.4m、上端幅44～92cm、下端幅28～72cm、深さ4～11cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。方向はN-3°～10°-Wである。西側の溝状の落ち込みの規模は、全長1.4m、上端幅35～47cm、下端幅23～27cm、深さ3～5cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。方向はN-38°-Wである。重複関係ではなく、堆積土はいずれもシルト層1層で、遺物の出土はなかった。

#### (2) 東区Vlc1層上面検出遺構(第22図)

東区の基本土層Vla1層上面において、浅い溝状の落ち込み2条が検出された。この2条の落ち込みは、東西方向(N-76°～88°-E)に延び、その規模は、上端幅31～82cm、下端幅20～55cm、深さ4～16cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。方向は、N-76°～88°-Eである。いずれも上層の基本土層であるVlb2層土を堆積土としており、遺物の出土はなかった。



第21図 東区VIIa層上面遺構

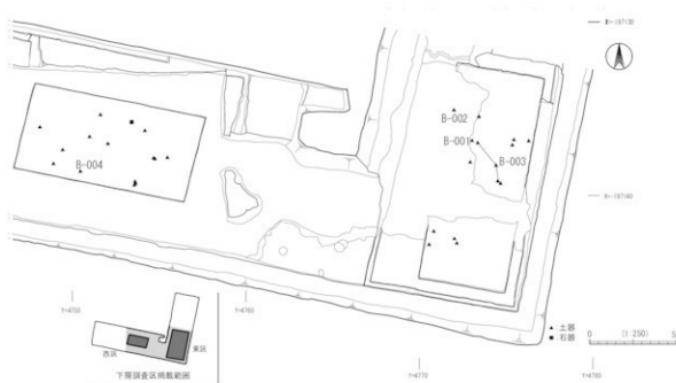


第22図 東区VIIc1層上面遺構

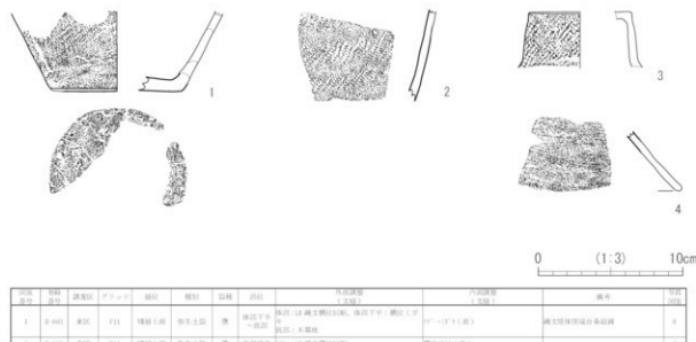
## 2. 出土遺物(第23~27図)

### (1) VIIa層出土遺物(第23・24図)

基本上層VIIa層からは、弥生土器が西区14点、東区15点、石器が西区1点、東区1点の計31点の遺物が出土した(第23図)。土器の特徴から弥生時代中期に比定され、そのうち4点の弥生土器を第24図に掲載した。1・2はいずれも蓋であり、1は底部に木葉痕が観察される。3は粗製の蓋で、天井部の径が約7cmと小型である。4は蓋もしくは鉢の破片で、内外面ともに丁寧なミガキ調整が施されている。



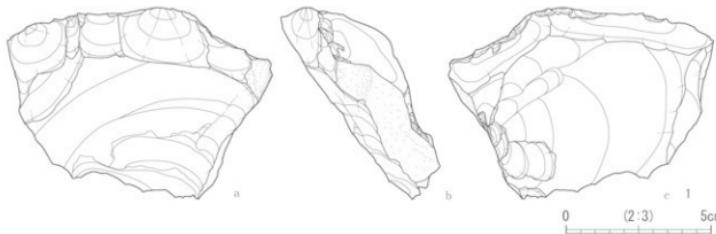
第23図 VIIa層出土遺物全体図



第24図 VIIa層出土遺物

### (2) VIIIb2層出土遺物(第22・25図)

東区の基本土層VIIc1層上面で検出された講落ち込み遺構の上面からやや浮いた状態で石器が1点出土したが、VIIIb2層の遺物として報告する。流紋岩製の石核である。石核から剥離ないし分割された厚みのある剝片の末端部を打面として利用し、剝片剥離作業が行われている。



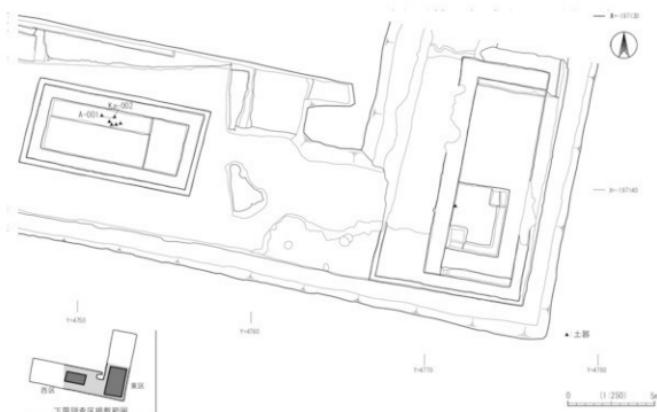
第25図 VIIIb2層出土遺物

### (3) Xb層出土遺物(第26・27図)

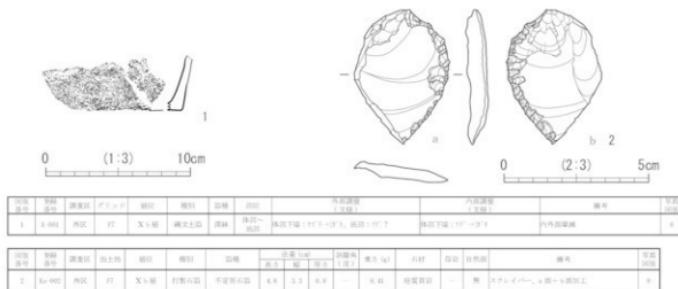
基本土層Xb層は、東区を南北に延びる谷状地の凹地やその周辺を厚く覆う堆積層である。東区ではこの凹地を埋めるXb層の堆積が厚く、一部でX1層を確認したにとどまるが、西区では安定した堆積を示していて、西区から縄文土器5点、石器1点の計6点が出土した(第26図)。明確に時期を判断できる遺物がないものの、縄文時代



後期～晩期の範疇に比定されると考えられる。1は繩文土器底部破片、2は珪質頁岩製の不定形石器で、一侧縁に表裏両面からの連続的な剥離によって刃部調整が施されており、スクレイパーと考えられる。



第26図 Xb層出土遺物全体図



第27図 Xb層出土遺物



## 第6章 西台畠遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

### 第1節 測定対象試料

西台畠遺跡は、宮城県仙台市太白区あすと長町土地区画整理事業地内に所在する。測定対象試料は、VII層出土炭化物 (No.1:IAAA-120650)、Ⅷa2層出土木炭 (No.2:IAAA-120651)、Xb層出土炭化物 (No.4:IAAA-120652) の合計3点である（表3）。No.1、No.4は遺物包含層に含まれる炭化物小片、No.2は自然堆積層上面で検出された倒木と考えられる炭化材である。出土遺物から、No.1は弥生時代中期中葉、No.2は弥生時代中期中葉以前、繩文時代晚期以降、No.4は縄文時代後期ないし晩期と推定されている。

### 第2節 測定の意義

同一地点における遺物包含層と自然堆積層、それぞれに含まれる炭化物の年代測定によって、当該地の地形変遷及び出土遺物の年代を明らかにする。

### 第3節 化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ②酸-アルカリ-酸 (AAA:Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表3に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 第4節 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とパックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 第5節 算出方法

- ①  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である（表3）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② <sup>14</sup>C年代 (Libby Age:yrBP) は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年



(OyrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $\delta^{13}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。 $\delta^{13}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代の誤差(±1σ)は、試料の $\delta^{13}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

③pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $\delta^{13}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $\delta^{13}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。

④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $\delta^{13}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ = 68.2%)あるいは2標準偏差(2σ = 95.4%)で表示される。グラフの縦軸が $\delta^{13}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $\delta^{13}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCal4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。暦年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される。

## 第6節 測定結果

試料の $\delta^{13}\text{C}$ 年代は、Ⅷ層出土炭化物No.1が2230±20yrBP、Ⅷa2層出土木炭No.2が2480±30yrBP、Xb層出土炭化物No.4が3100±30yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、No.1が365~211 cal BC、No.2が753~540 cal BC、No.4が1420~1321 cal BCの間に各々複数の範囲で示される。No.1は弥生時代中期頃、No.2は绳文時代後葉から弥生時代への移行期頃、No.4は绳文時代後期後葉頃に相当する年代値で(小林編2008、小林2009)、出土遺物から推定される時期とおむね整合的と考えられる。

試料の炭素含有率を検討すると、No.2、No.4は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。No.1は炭素含有率が24%という炭化物としては低い値を示した。これは土を完全に除去できなかったためで、年代値の解釈には注意を要する。

### 《参考文献》

- |                            |      |  |
|----------------------------|------|--|
| Bronk Ramsey C.            | 2009 | 「Bayesian analysis of radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1), 337-360  |
| 小林謙一                       | 2009 | 「近畿地方以東の地域への扩散」西本豊弘編「新弥生時代のはじまり」第4巻、雄山閣、55-82  |
| 小林道雄編                      | 2008 | 『延喜式土郡』総観識文庫刊行委員会、アム・ブロモーション   |
| Reimer, P.J. et al.        | 2009 | 「IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP」『Radiocarbon』51(4), 1111-1150 |
| Stuiver M. and Polach H.A. | 1977 | 「Discussion: Reporting of $^{13}\text{C}$ data」『Radiocarbon』19(3), 355-363                                     |



測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		
					(AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	Libby Age (yrBP)
IAAA-120650	No. 1	層位 : VII層	炭化物 AaA	-11.22 ± 0.32	-11.22 ± 0.32	2,230 ± 20	75.79 ± 0.21
IAAA-120651	No. 2	層位 : VII a2 層	木炭	AAA	-28.77 ± 0.30	2,480 ± 30	73.46 ± 0.24
IAAA-120652	No. 4	層位 : X b 層	炭化物 AAA	-27.38 ± 0.35	-27.38 ± 0.35	3,100 ± 30	67.95 ± 0.23

第3表 測定結果(補正值)

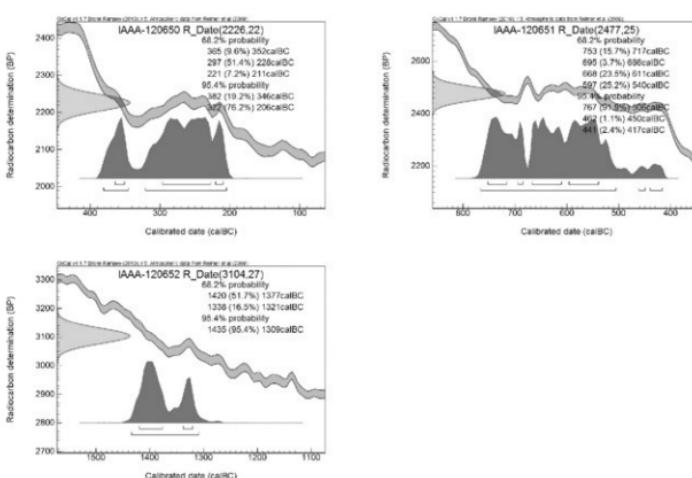
[# 5206]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年範囲		$2\sigma$ 曆年範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-120650	2,000 ± 20	77.95 ± 0.21	2,226 ± 22	365calBC - 352calBC (9.6%) 297calBC - 228calBC (51.4%) 221calBC - 211calBC (7.2%)	382calBC - 346calBC (19.2%) 322calBC - 206calBC (76.2%)		
IAAA-120651	2,540 ± 30	72.89 ± 0.23	2,477 ± 25	753calBC - 717calBC (15.7%) 695calBC - 686calBC (3.7%) 668calBC - 611calBC (23.5%) 597calBC - 540calBC (25.2%)	767calBC - 506calBC (91.9%) 462calBC - 450calBC (1.1%) 441calBC - 417calBC (2.4%)		
IAAA-120652	3,140 ± 30	67.61 ± 0.23	3,104 ± 27	1420calBC - 1377calBC (51.7%) 1338calBC - 1321calBC (16.5%)	1435calBC - 1309calBC (95.4%)		

第4表 測定結果(未補正值)

[参考値]

## 【参考】曆年較正年代グラフ





## 第7章 総 括

今回調査を行った第8次調査地点は、昭和30年代まで煉瓦工場があり、当時工場の周辺ではその原料となる粘土の採掘が行われており、西台畠遺跡の発見もその粘土の採掘中に弥生土器が出土したことを経緯としている。今回の調査区でも、粘土採掘による影響が広範囲におよんでいたため、検出された遺構も残存状況は良好ではなく、出土遺物も少ないが、各遺構の帰属時期について整理し、まとめたい。

### 1. 縄文時代後期～弥生時代中期

基本土層X b層から、土器5点と珪質灰岩製の石器1点が出土している。明確な時期を特定できる資料ではないものの、これまでの周辺での調査成果等から、縄文時代後期中葉から晩期のなかに比定されると思われる。また、VII b2層からは、流紋岩製の石核が1点出土。VII a層からは、細片が中心ではあるが弥生土器が約30点程出土している。これらの土器は、器形や施文方法及び周辺での調査成果から弥生時代中期中葉に比定されるものである。

こうした状況は、これまでの調査成果とも合致することから、VII層からVI層までの3面の遺物包含層については、縄文時代後期中葉から弥生時代中期中葉の時間幅のなかに位置づけることができる。

### 2. 古墳時代～奈良時代

この時期の遺構としては、基本土層IV層上面で検出した竪穴住居跡3軒と溝跡1条がある。竪穴住居跡について、は、遺構の重複関係や出土遺物から、概ね6世紀末葉から8世紀前葉の時間幅におさまるものと考えられる。

3軒の竪穴住居跡はいずれも一部の検出のみで、特にSI129以外は、床面もなく掘り方での検出となったことから主軸方位ははっきりしないが、SI129は長軸基準でN-51°-E、他の2軒は残存する壁辺から、SI130がN-45°-E、SI131がN-57°-Eである。

今回の調査地点は西台畠遺跡集落の南西部に位置しているが、北に隣接する第7次調査区で確認され、西台畠遺跡集落の西辺を区画している可能性が考えられている材木列は、その西側に検出された河川跡と同方向に延びている状況があり、その方向がN-56°-Eであることから、今回検出した竪穴住居跡の配置や方向が材木列や河川跡に影響されている可能性が考えられる。

### 3. 平安時代～中世

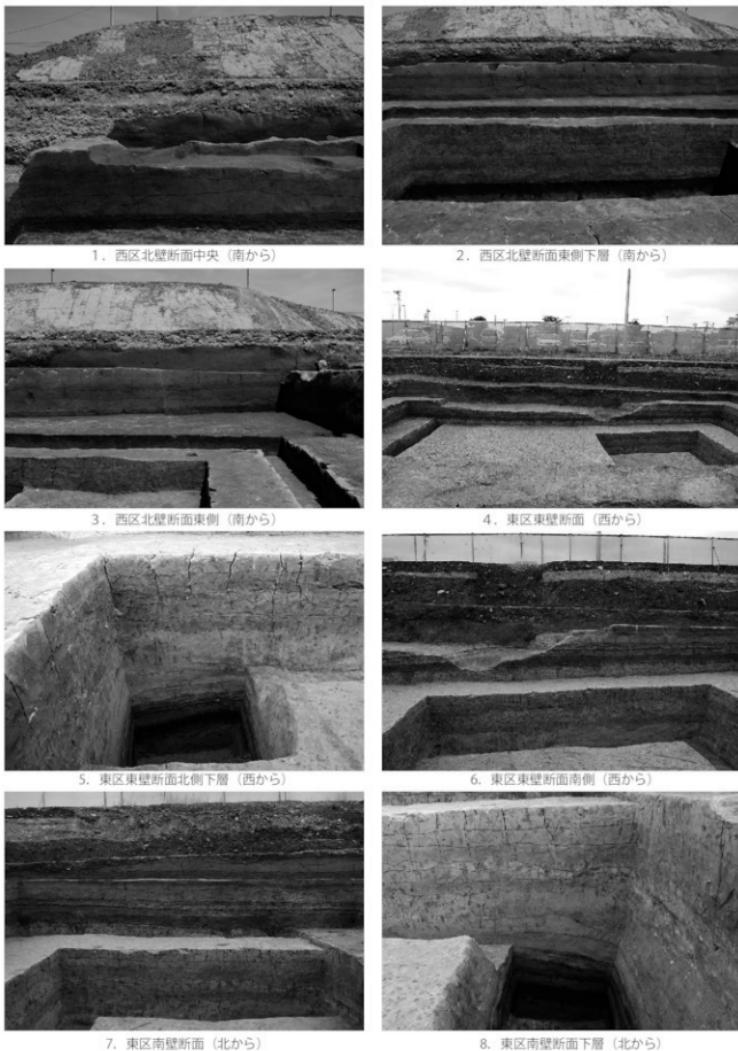
この時期の遺構としては、溝跡3条、小溝状遺構、性格不明遺構9基、ピット30基などがある。共伴する出土遺物が無いため明確な帰属時期や遺構の性格は不明であるが、他遺構との重複関係から、今回の調査で検出された最も新しい時期の遺構群と考えられる。

#### 《参考文献》

- |           |       |  |
|-----------|-------|--|
| 伊藤玄三      | 1958  | 「仙台市西台畠出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻第1号、日本考古学会              |
|           | 1993  | 「仙台市西台畠弥生時代墳墓の横溝財」『法政考古学』第20集、法政考古学会               |
| 工藤信一郎     | 2008  | 「長町駅東道跡・西台畠遺跡の調査から」『第34回古代城柵官衙道跡検討会資料集』古代城柵官衙道跡検討会 |
| 佐藤敏幸      | 2006  | 「東北地方における7世紀から8世紀前半の土器研究史」『宮城考古学』第8号、宮城県考古学会       |
| 仙台市教育委員会  | 2005  | 「郡山道跡発掘調査報告書(足利編)」仙台市文化財調査報告書第283集                 |
|           | 2010a | 「西台畠遺跡第1～2次調査」仙台市文化財調査報告書第359集                     |
|           | 2010b | 「治向遺跡第4～34次調査」仙台市文化財調査報告書第360集                     |
|           | 2011  | 「西台畠遺跡第3次調査」仙台市文化財調査報告書第388集                       |
| 東北古代土器研究会 | 2005  | 「東北古代土器集束～古墳時代～奈良編」(集落編)『宮城考古学』研究報告2               |
| 村田寛一      | 2000  | 「鳥島・奈良時代の陸奥北辺～移民の時代～」『宮城考古学』第2号、宮城県考古学会            |

# 写真図版





写真図版 1 基本層序・壁断面



1. 西区古代面検出全景（西から）



2. 東区古代面検出全景（南から）



3. 西区古代面完掘全景（西から）



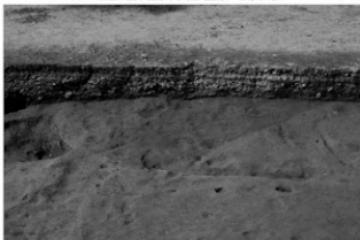
4. 東区古代面完掘全景（南から）



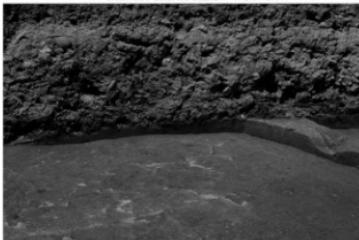
5. 西区古代面中央部全景（南から）



6. 西区古代面東側全景（南から）

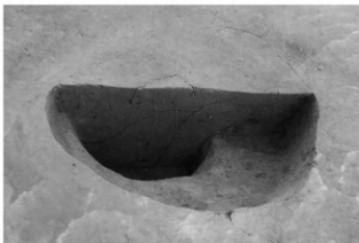


7. SI129 検出全景（南から）



8. SI129 北壁断面（南西から）

写真図版2 調査区全景・竪穴住居跡(1)



1. SI129P1 断面C (西から)



2. SI129 床面A 検出全景 (南西から)



3. SI129 床面A 全景 (南西から)



4. SI129 貼床断面A (南西から)



5. SI129 床面B 全景 (南西から)



6. SI129 掘り方検出全景 (北から)



7. SI129 掘り方壁断面I (南西から)



8. SI129 掘り方全景 (南西から)

写真図版3 壁穴住居跡 (2)



1. SI130・131 棟出全景（北から）



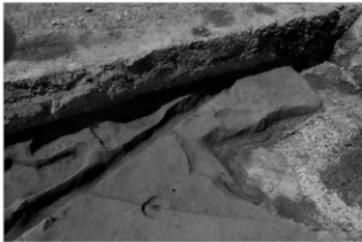
2. SI130 壁板縫検出状況（西から）



3. SI130 断面B 北側（南から）



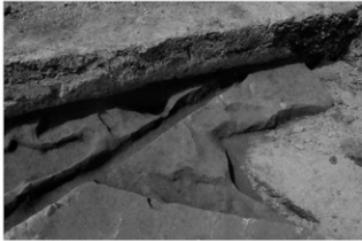
4. SI130 断面B 南側（南から）



5. SI130 挖り方検出全景（北東から）



6. SI130 挖り方断面 B（南から）



7. SI130 挖り方全景（北東から）



8. SI131 挖り方断面 A（北東から）

写真図版4 積穴住居跡（3）



1. SD79(西区東側)断面A(西から)



2. SD79(西区東側)全景(南西から)



3. SD79(西拡張部)断面A(東から)



4. SD79(西拡張部)全景(南西から)



5. SD80 全景(南東から)



6. SD81 全景(南から)

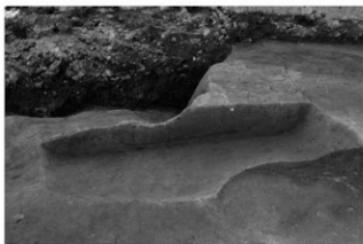


7. SD82 全景(北東から)



8. SX1 全景(南から)

写真図版5 溝跡・性格不明遺構(1)



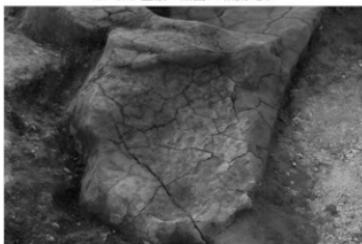
1. SX2 断面（南から）



2. SX3 全景・断面 A（南から）



3. SX4 断面 A（南から）



4. SX4 全景（東から）



5. SX5 全景・断面 A（北東から）



6. SX6 全景・断面 A（北から）



7. SX7 断面 A（北東から）



8. SX7 全景（北から）

写真図版6 性格不明遺構（2）



1. SX8 断面A (東から)



2. SX8 全景 (東から)



3. SX9 全景・断面 A (北から)



4. 東区下層調査VIa層上面全景 (南から)



5. 西区下層調査VII層遺物出土状況 (南から)



6. 東区下層調査VII層全景 (南から)

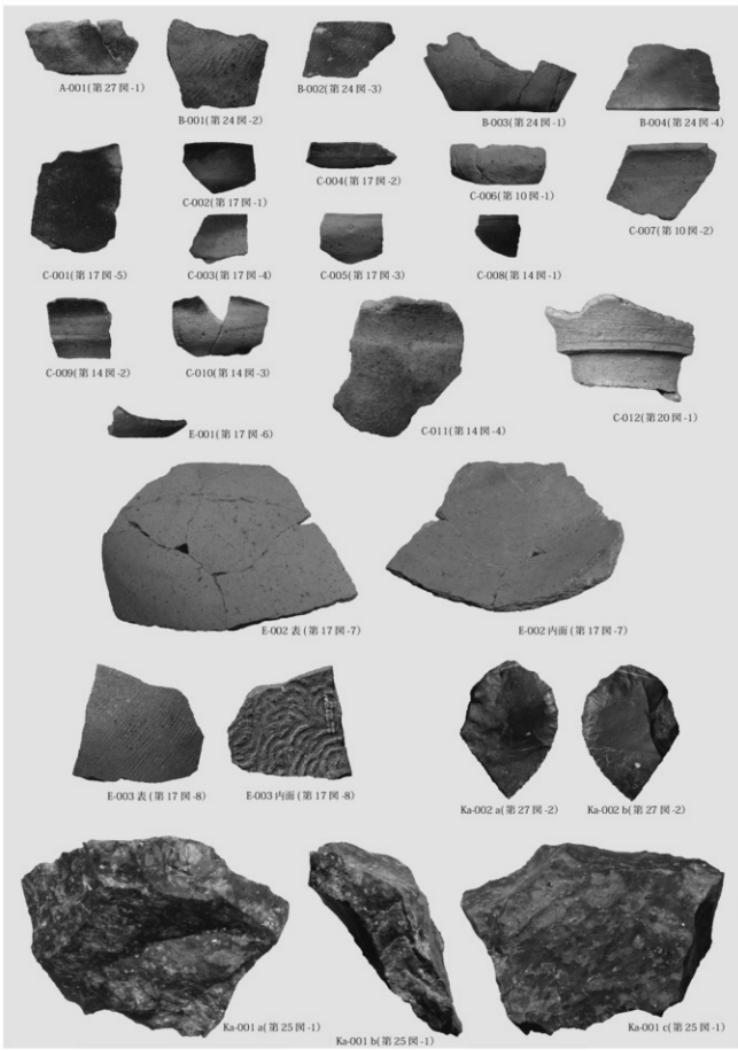


7. 東区下層調査VIIc層遺物出土状況 (南から)



8. 西区下層調査Xb層遺物出土状況 (南から)

写真図版7 性格不明遺構(3)・下層調査



写真図版 8 出土遺物

報告書抄録							
ふりがな	にしだいばたけいせきだいはじちょうさ						
書名	西台烟遺跡第8次調査						
副書名	仙台市あすと長町26街区・高齢者福祉施設建設に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第409集						
編著者名	工藤 信一郎 黒田 智章 辻 広志 佐藤 洋						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区一番町4丁目1番25号 東二番丁仮序舎						
発行年月日	2013年1月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
西台烟遺跡	宮城県 仙台市太白区 郡山二丁目	4100	01005	38°13'16" 53'28"	2012/6/12 ~ 2012/8/3	791	高齢者福祉 施設建設工事 に伴う 発掘調査
所取遺跡名	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西台烟遺跡	縄文時代	包含地		縄文土器			
	弥生時代	包含地		弥生土器 石器	・弥生時代中期中葉の 土器が出土		
	古墳時代	居住域	堅穴住居跡、溝跡	土師器 関東系土器 須恵器	・郡山遺跡の官衙に関連 する集落とそれに前後 する時期の集落		
	奈良時代	居住域	溝跡、小溝状遺構群	陶器			
	平安時代 中世	居住域	ピット				
要約	<p>西台烟遺跡は、昭和32(1957)年に煉瓦工場敷地内での粘土採掘中に弥生土器が出土したことを契機として発見され、仙台平野における弥生時代中期の土器編年や葬制を考える上で学史的にも広く知られる遺跡である。</p> <p>今次発掘調査の結果、縄文時代から近世にいたるまでの遺構・遺物が検出された。</p> <p>6世紀末葉から8世紀前葉に比定される堅穴住居跡3軒が検出され、第1~3次調査で確認された居住域の範囲は、さらに西側に拡がっていることが明らかとなった。</p> <p>また出土した弥生土器は、器形や装飾文様等の特徴や周辺の調査成果から、弥生時代中期中葉に位置付けられる。</p>						



---

仙台市文化財調査報告書第409集

## 西台 煙 遺 跡 第 8 次 調 査

—仙台市あすと長町26街区・高齢者福祉施設建設に伴う発掘調査報告書—

2013年1月

発 行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区一番町4丁目1番25号

文化財課 022(214)8899

印 刷 株式会社ホクトコーポレーション

仙台市青葉区上愛子堰切1-13

022(391)5661

---